
コナン、元旦パニック

千景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「コナン、元旦パニック

【NZコード】

N9046D

【作者名】

千景

【あらすじ】

初詣に向かった、コナンと蘭、小五郎の三人は、そこで事件にくわした。果たして「コナンは・・・

「つたくよ、なんだつてこんなとこに来なきや いけねえんだ」
「もー、ぶつぶつといつるさいわよ。もうこじままで来たんだから、あ
きらめてよお父さん。往生際が悪いわよ」
「だつてよ、蘭・・・正月ぐれえ家でゆつくりしようぜ、なあ」
「もう、こつもゆつくりしてるじやない、お父さんは。それにお正
月と言えば、初詣でしょ。ね、コナン君」
「そ・・・だね」
(でも、だからつて元旦に来なくともいいんじやねえか? 今回ばかりは、おっちゃんに賛成だぜ)
こじまは米花神社鳥居前。この辺りではそこそこ大きな神社で、町
内の人間はもちろん、他の地区の人間も参拝にやってくる。その為、
正月ともなると、あまりの人の多さに、境内への入り口は無き等し
かつた。
「本当にこじまを通つて行くのか~蘭? すつげえ人だぞ」
小五郎は前方で待ち構えている人の海を見てげんなりとする。
「え~、せつかく着物も着て来たんだし、お父さん達も袴着なんだ
からお賽銭だけでもあげに行こうよ。ねつ、そうしよ。・・・とい
うことで、行くわよ二人とも!」
(蘭のやつ、たんに着物が着たかつただけじやねえのか)
新一と小五郎の二人は半ば蘭の勢いにおされ、しぶしぶ後につい
て行つた。
「あ、コナン君は、はぐれたら大変だから手を貸して」
「あ、うん」
新一は言われるがまま手を伸ばし、その手につかまつたが、なか
なか思うように前へ進む事ができなかつた。
「あつ、あつ」
繋いだ手が離れそうになる。

何度も手を繋ぎ直そうとしが、それは人波によつて阻まれた。

「コナン君、しつかりつかまつて」

「う、うん。あ、蘭姉ちゃん」

そつは言つが、この小さな体では前も見えない状態だ。手を繋ごうとしても、簡単なはいかつた。ついには人波に押され、蘭からどんどん遠ざかつて行く。

「コナン君！」

蘭は必死に手を伸ばし、コナンの手をつかもうとするが、それは失敗に終わった。

「つたく、しようがねえな」

（え・・・・）

がつしりとつかまれた大きな手に、新一は驚き、その手の主を見上げる。それは、小五郎だつた。

「今だけだからな」

「わつ」

引き寄せられ、突然訪れた浮遊感。視界が開け、前方に鳥居、下には人の絨毯ができている。

新一は小五郎の両腕に抱え上げられ、肩車をされていた。

「お、おじさん」

おかげで、人波に流されずにすんだのだが、妙に照れくさかつた。普段は自分の事を気にもかけない小五郎が、起こした行動にも、高校生にもなつて肩車をされている自分にも。

新一は、小五郎の肩の上で居心地が悪そうに身じろぎをする。

「こら、動くなコナン！このまま、人の下敷きになりたくなかったら大人しくしろいつ。俺だつて好きでやつてんじゃねえからな」

「あら、よかつたわね、コナン君。肩車なんかしてもらつてなんとか人混みを掻き分け、一人のもとに近づく事ができた蘭は新一を見上げる。

「恥ずかしいよお、ねえ、おじさん」

「なーに言つてやがる。恥ずかしい事があるものか、ガキのくせに。」

仕方ねえだろ、この人の多むじや、お前みたいなチビには危ねえからな

「コナン君つたら、照れちゃつて。私も小さじ頃はよく肩車してもらつたわよ

「・・・」

時々、自分の姿が七歳の子供である事を忘れる。

そうだ、自分は高校生であつて、高校生ではないのだ。肩車をしてもらつても少しも恥ずかしがる必要はない。しかし、そう考えても、やはり照れくさいと思う自分がいる。また逆に、どこかで懐かしさを感じている自分がそこにいた。

（そういうや、俺も小せえ頃、親父によく肩車をしてもらつたつける。）

少しばかり懐かしい気分に浸つてゐるつゝ、よつやく賽銭箱の前まで来ることができた。

「やつと、着いたあ。はい、お父さん。これ、コナン君ね」

「たかが賽銭に、百円はもつたいない。十円はねえのか

「もう、お父さんつたら、貧乏くさい」と言わないでよ

一人は蘭から小銭を受け取り、賽銭箱に投げ入れる。信仰心もないのに、お参りとなると、熱心に願つてしまつのが日本人の常というものだ。

三人とも、パンパンと両手を鳴らし、願いを囁く。（どうか、元の体に戻れますように）

殊更に新一は真剣だった。早く黒の組織を見つけ出し、元の自分の姿に戻りたかった。このまま、コナンの姿でいるわけにはいかない。

新一はあらためて心に強く思い、そう決心するのだった。

閉じていた目を開くと、ニヤケタ顔をして小五郎が何かブツブツ

と呴いていた。微かにハハハハと笑う声が聞こえてくる。

（つたぐ、スケベそうな顔して、何を考えているか一目瞭然だな、こりや。たかが賽銭つて言つてたのは誰だ？）

はははと乾いた笑いをもらし、新一は蘭の方を見る。手を合わせ下を向く蘭の頬は、何故かほんのりと赤みを帯びていた。

(何を考えてんだ？ 蘭の奴)

「なあに、コナン君？」

「え、あ、あの、蘭姉ちゃんは何をお願いしたのかなーと思つて思わずじつと見てしまつっていた事に気づき、慌ててごまかす。

「へへへ、内緒。口にすると願い事叶わなくなつちやうつもの。そういうコナン君は何をお願いしたの？」

(言える訳ねえだろ、工藤新一の姿に戻りたいなんて)

「僕も内緒。あ、そうだ、蘭姉ちゃんもう一枚小銭ちょうどだい。だ

め？」

「いいけど、どうしたの？」

「うん、もう一つお願ひして」と思つて

「そう。はい、じゃあ五百円」

「ありが・・・」

小銭を受け取ろうとした瞬間、背後から女の悲鳴があがつた。

「きやああつ！」

「な、なんだあ！？」

神社では不釣り合いな叫び声に、小五郎は驚き背後を振り返る。すると今度は左側から悲鳴があがつた。

「いやああつ、嘘でしょお！」

「やああつ！ あたしのバッグが！」

(何だ？ 何が起きてるんだ)

次々にあがる叫び声。新一は周囲のただならぬ雰囲気に辺りを見回す。

「おじさんつ見て！」

指差した女の着物の袖がスッパリと裂け、腕につつすりと血が滲んでいるのがわかる。明らかに刃物によるものだ。

「こりやあ、一体・・・」

「誰かに刃物で切られたんだよ！」

「んなこたあ、分かつてるよ！」

「ねえ、なんなのよお、お父さん」

蘭は不安そうな表情を浮かべ、一人を見上げる。

（通り魔・・・か。他人の衣服や、持ち物を切つて喜んでやがるんだな。カッター？いや、切れ味からするとかなりの代物の可能性が高い。犯人はまだ近くにいるはずだ）

「おじさん、あっちの方が、人すいてるから行つて！」

「お、おう」

比較的人の少ない場所へ移動し、新一はそれらしき人物がいないか、注意深く辺りに目をやる。

一刻も早く犯人を見つけなければ。新一は焦りを覚えていた。いつも犯行の対象が衣服や物から人間に変わるか分からぬからだ。

「！」

一人の男の姿が目にとまる。ブルーのジャケットにグレーのズボン。マフラーをしており、口元が隠れていた。帽子もかぶっている。一見普通の人物に見える。だが、その殺氣立つた目は隠せていかつた。

（いた。こいつか）

探偵としての勘がこの男だと告げる。

男はジャケットの懐に手を忍ばせていた。刃物を隠し持つているのは明らかだ。だが、捕らえようにも、こんな人混みの中で暴れまわられても困る。どうしたものかと、新一が考えを巡らせていると、男は人混みを搔き分けゆっくりと動き出した。

嫌な予感がした。男の目線を追うと、そこに、蘭の姿があつた。

（まさか・・・）

男がこちらに向かつて少しづつ近づいて来る。男の目が一瞬笑つたような気がした。

「蘭！後ろつ！」

「えつ？」

その声に振り返ると、サバイバルナイフを振りかざした男がまさ

に、自分を切りつけようとしている瞬間だった。

「はあつ！」

蘭は半ば条件反射で、男の腕を脇に抱え込む。

すかさず男の手からナイフを払い落とし、顔面に掌打をくらわせた。男は思わず反撃に慌ててその場から逃げ出す。

「あ、待ちなさい！」

蘭は後を追おうとしたが、着物がそれを阻む。

「おじさんつ、追つて！」

「おうつ」

小五郎は新一を肩車したまま男の後を追う。しかし、その姿は人混みの中に消えてしまった。

「ちきしょうつ、どこいきやがつた、あのヤロー！」

「おじさんつ、右！」

周りより高い位置にいた新一には、かろうじて、男の姿が見る事ができた。

「あつちの社の方にいっただんだ！」

「ヨツシヤ！コナンでかしたつ」

小五郎は新一の指差す方へと急ぐ。一人が進む方向には改装中の社があった。

「いねえぞ、確かにこっちに来たんだろうな」

「間違いないよ」

社の前まで来ると、他の人間は誰もいなくなつた。

この先は一本道である。通り魔がこの辺りに潜んでいるのは間違いない。

「よし、コナン。お前ここでまつてろ」

「えつ」新一は小五郎の肩から下ろされる。

「僕も行く」

「ダメだ。相手は刃物を持っていた通り魔だぞ。お前は危ねえから、ここで大人しくしてろ」

「あつ」

言つが早いが、小五郎はこの先の道を真つ直ぐ走つて行く。新一はその背を見送るしかなかつた。

「くそつ」

犯人を追いたかつた。子供だと思い通りにならない時がある。こんな時、子供の姿である自分に苛立ちを感じずにはいられなかつた。（・・・？）

先程の騒ぎが嘘かのように静まり返つてゐる中、ふと、人の気配を感じ新一は辺りを見回す。

しかし、誰もいない。

（今、確かに人の気配が・・・）

一瞬感じた気配をもう一度探ろうと、注意深く周りを窺う。その時、視界の隅で人影が動く。

（いた・・・）

犯人だ。この先に逃げて行つたとばかり思つてゐたが、近くで息を潜めていたのだ。

「それで隠れたつもりかい？」

「！」

犯人は答えない。新一は男が隠れている社の方へゆっくりと歩き出した。

口元にはうつすらと笑みを浮かべている。

「出てきなよ。隠れても無駄だよ？通り魔のお兄さん」
新一本來の姿が垣間見えた。

常に子供のふりをしてきた偽りの仮面が今、剥がれる。言葉使いも、顔の表情も大人のそれへと変化した。

まぎれもなく、今、ここにいる人間は江戸川コナンではなく、名探偵工藤新一その人であった。新一の歩みが止まる。男が社の陰から姿を現したのだ。

「まったく、正月そうそつ何を考えてんだか。どうする？大人しく自首するかい？」

「生意気な口を叩くな。ガキが」

「もう一本持つていやがったのか」

その手にはナイフが握られていた。

新一は男から目線を外さず、隙を窺う。時計型麻酔銃をいつでも発射できるよう、後ろ手に準備した。

「着物を切つたり、つまんねーことしてんじゃねえよ。女性しか狙えねえ、小心者者が」

わざと相手を挑発する。神経を逆撫でし、飛びかかって来たところを麻酔銃で撃つつもりだつた。

「このクソガキがっ！」

思惑通り男は新一の言葉にキレ、飛びかかる。その一瞬の隙を見て、新一は麻酔銃を撃つた。

しかし、それは失敗に終わる。犯人に刺さるはずの針が、首に巻かれたマフラーによつて、阻まれてしまつたのだ。

（しまつた！）

目の前でナイフが光る。

避けきれない。

そう思つた瞬間だつた。目の前に影がよぎる。そして聞こえたドンという大きな音。

それはまさに一瞬の出来事だつた。

「大丈夫か？ コナン」

頭上から聞こえて来る声は毛利小五郎その人だつた。

「お、おっちゃん・・・・？」

小五郎の思わぬ登場に驚いた。男は足元で完全にのびている。見事な一本背負い。

日頃のだらしない姿を見ていると想像もつかないが、小五郎は柔道の有段者だつた。見かけによらず強いのだ。

（力、カツコイイ・・・）

「たく、もしゃと思つて、戻つて来て正解だつたな」

小五郎の声に、はつと我に返る。小五郎が決めた一本背負いに、不覚にも格好いいなどと思つてしまつた自分が急に恥ずかしくなり、新一はぶんぶんと頭を振り回す。

「おい、何してんだ？・・・怪我はどこもねえのか」「だ、大丈夫だよ」

「・・・怪我ねえんだつたら、いつまでも座りこんでないで、立て「あ、うん」

新一は立ち上がり、袴に付いた砂を払い落とす。

「・・・ところで、おじさん何してるの？」

見ると小五郎は、木に巻き付けてある、しめ縄を取り外そうと必死になつていた。

「決まつてんだろ？、これで奴をふんじぱつとくんだよ。ちきしょう、案外かてえな、この結び目」

(一)「このおやじは・・・」

「これでよしつと」

通り魔の男を手近な木に縛り付け、手を叩く。

「行くぞ、コナン」

「行くつて・・・この人どうするの！？」

「ああ、後で警察に連絡しどきやいいだろ？」「こいつ受け身もとらぎに、もろに地面に突つ込んだからな。当分目を覚まさねつて。それに、さつきの騒ぎで警備員も沢山うろついてるしな」

「で、でも」

「いいんだよ、正月早々つまんねえ」「たごたに巻き込まれるのは」「めんだからな。とつとと、蘭見つけて、帰るぞ」

小五郎は有無も言わさず、一人ですたすと歩いて行く。

「あ、待つて」

新一は慌てて、小五郎の後を追つた。そして・・・。

「・・・おい

「え？」

小五郎の声に頭上を仰ぎ見る。そこには、心なしか戸惑つ様子の

顔があつた。

何を不思議そうな顔をしてるんだと、新一はほんやりと考ふる。

「おじさん?」

「・・・やっぱ、どこか怪我してるのか?」

「うんうん、してないけど何で?」

「おめえ、何なついてるんだ?」

その言葉に新一は初めて気がついた。自分が当たり前のようだつて、小五郎の手を取り、隣に並んで歩いていふと、いう事を。

小五郎の手を取り、隣に並んで歩いていふと、いう事を。

無意識の行動だつた。

子供の姿になつてから、蘭と手を繋いで歩く事が多くなつて、いた

新一は、自然と自ら手を伸ばすようになつて、いたのだ。

「い、ごめんなさい」

(何やつてんだ!?)俺つ

新一は自分がとつた行動に驚き、慌てて手を離そうとした。すると、その手を小五郎が握り返す。

「...」

見ると小五郎は新一から顔を背けて、いる。「・・・いいか。今回だけだからな。ま、間一髪だつたからな。」

そう言つ小五郎の耳は赤かつた。

新一もつられて顔が赤くなる。

おそらく小五郎は、通り魔に襲いかかられそうになつた新一^{コナン}が怖がつて、いると思つたのだろう。

大人である小五郎からしてみれば当たり前の事だろう。しかし、高校生である新一にとつてはとても照れくさい事だつた。

小五郎の手には慣れていない。蘭と違つて、大きくて、『ひつごつしてて、そして、暖かかつた。

「本当に、今回だけだからな」

小五郎は念を押すらしくないことをして、いると重々承知しているので、繋ぐ手もどこかぎこつない。

そんな小五郎の様子に新一は思わず笑みをこぼす。

「な、なんだよ。なにがおかしい」「へへつ、何でもない」

(らしくねえことするから、いつまで照れる。ま、親子じつこもたまにはいいか)

「ねえ、おじさん」

「なんだ」

「僕ね、小さい頃よく肩車してもらつたんだ。すいへ、高いんだよ」「今も十分小せえじゃねえか」

「蘭姉ちゃんを見つけやすいと思つんだ。だから、ね?」

「・・・しようがねえなあ」

そう言つと、小五郎は新一ね体を抱き上げ、肩の上に乗せる。

「わあい、高い」

我ながら子供のフリが上手くなつたと内心思いながら、新一は必要以上に喜んでみせた。しかし、心のどこかで、それを楽しんでいる自分に気がついていた。

小さい頃、母親は女優業に忙しく、小説家の父親は職業柄、部屋にこもりがちだった。

そんな両親のもとで育つた新一には、遊んでもらつた記憶があまりなかつた。だからかもしれない。

「こり、じつとしてろ!」

「はーい。そだ、おじさん。後で百円頂戴。さつき、蘭姉ちゃんにもらひそびれたから。ぼく、もう一回お参りしたいんだ」

「んなもん一回で十分だ」

「お願い。一つお願い事忘れたんだよ」

新一の猫なで声に、しぶしぶ小五郎は承諾する。

「もう一回お参りするほど大層なお願いなのか?」

「うん」

新一には密かに思う事があつた。

元の姿に戻りたい。その切なる願いは本物だ。だけど、一方で、

「つして蘭と小五郎と三人で一緒にいるのも悪くない。

「ナ・ンの姿でいる間だけでも、こんなふうにしていらっしゃれたらいいなと思うのも事実だつた。

できつるかぎり、ながく、一緒に。

「どんなお願いだよ」

「内緒だよ。さ、蘭姉ちゃん探しに行こ」つよ

「ああ、そつだな」

二人は元来た場所へと向かう。

父親に肩車をしてもらつて、笑う子供の姿は誰が見ても微笑まし

い。

はたから見れば、二人はそんな仲の良い親子に見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9046d/>

コナン、元旦パニック

2010年10月8日13時39分発行